

宮沢賢治作品における岩頸表象（四）

— 童話「榎ノ木大学士の野宿」に関する細田嘉吉論文を踏まえて —

鈴木健司

— はじめに

童話「榎ノ木大学士の野宿」は、三夜からなる夢の話だが、第一夜に岩頸の四人兄弟が登場する。主人公である榎ノ木大学士は、上等な蛋白石（オパール）を採取すべく葛丸川を遡っていくが、日が暮れてしまい川べりの石の上に野宿することになる。その夢の中に、岩頸四人兄弟が登場するのである。

水がその広い河原の、

向ふ岸近くをごとと流れ、

空の桔梗のうすあかりには、

山どもがのっきのっきと黒く立つ。

大学士は寝たまゝそれを眺め、

又ひとりごとを言ひ出した。

「ははあ、あいつらは岩頸だな。岩頸だ、岩頸だ。

相違ない。」

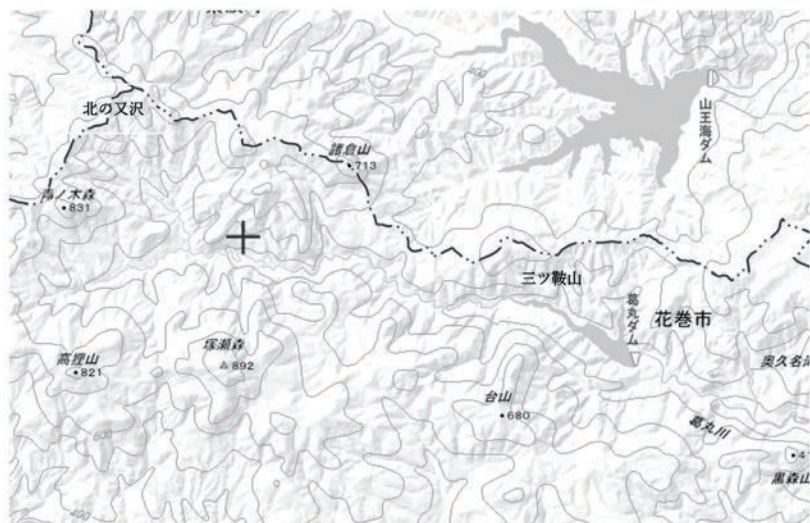
そこで大学士はいゝ気になって、

仰向けのまゝ手を振って、

岩頸の講義をはじめ出した。

榎ノ木大学士が入った葛丸川は、実在の川の名である。青ノ木森付近に水源をもち、石鳥谷（花巻市北方）を西から東に流れ、北上川に注ぐ。それを地図で示すなら次（図一）のようになる。

現在の葛丸川には、中流域に葛丸ダムが存在している。葛丸ダムは一九七八年の着手、一九九一年竣工であり、当然のことだが賢治の頃は存在していない。葛丸川の少し下流域に三ツ鞍山があり、その安山岩（破碎の亀裂部分）には、蛋白石（オパール）とおぼしき白色の充填物が存在し、崖や川底に脈のように美しく浮き出ている



(図1)

(注1)。

二 細田嘉吉論文の検証

二一 賢治の葛丸川流域の地質調査日程

賢治が「榎ノ木大学士の野宿」を書くことができたのは、大正七年五月の葛丸川流域への地質調査の経験があったからであり、三ツ鞍山付近で白色の「下等な玻璃蛋白石」を観察したことが契機になっていると考えられるだろう。「榎ノ木大学士の野宿」に関する地質学的な視点からの分析は、細田嘉吉の「地学から見た「榎ノ木大学士の野宿」」(「宮沢賢研究治Annual」Vol.9、宮沢賢治イニハトーブセンター、一九九九・三)(注2)で詳しく論じられていることだが、細田の研究は、その地質学的見識と地元ゆえのフィールドワークの確かさを持って、秀抜な先行研究となっている。本論では、おもに第一夜を検証の対象とする。

細田の論を支えているものは、葛丸川の源流付近に存在する青ノ木森という山の存在である。「榎ノ木大学士の野宿」の初期形が「青木大学士の野宿」であったことから、青木大学士の命名が青ノ木森に由来するのではないか、という推定が成り立つ。「青木」と「青ノ木」との違いは大きなことでなく、「榎ノ木大学士の野宿」の

原稿も表紙には「檜木大学士の野宿」と記されていることから、「青木」と「青ノ木」は同じと考えることに問題は無い。

賢治が葛丸川を遡ってどこまで行ったのか、そのあたりのことは資料的にはっきりと裏付けるものがなく、私自身、行程に関する細田の推定をそのまま支持しているわけではない。まずは、もっとも基礎的な資料となる、大正七年五月二日の父政次郎あて書簡No.60を見てみる。

昨日は雨天に御座候処予定の調査を終へ昨夜は当小学校の宅に泊り衣類も全く乾かし貰ひ候

本日は晴れさうにも見え候へども割沢まで川沿いに調査致し明日晴天ならば割沢より山地を経て当所に帰花仕るべく候

書簡の表には「五月二日朝 大瀬川小学校にて 賢治」と記されている。大瀬川小学校は、現在石鳥谷小学校に統合されているが、当時石鳥谷町大瀬川にあり、葛丸川に近い場所である。賢治はここを起点に葛丸川に入ろうとしていたのである。細田の推定する賢治の行程は、次のようである。

第一日（大正7年5月2日）大瀬川牛崎方↓畑↓割沢↓北の股↓鍵掛峠方向へ（ラクシャン四兄弟を展望）↓合流点落合↓大石権現付近の炭焼き小屋に泊まる（第一夜野宿）

第二日（大正7年5月3日）炭焼き小屋（第一夜野宿）↓割沢↓大噴硫黄鉱山↓塚瀬森（東方北上準平原・早池峰山・日向居木山など展望）↓円森山（炭焼き青年と会う）↓大興寺↓花巻

細田の推定に関し、再考が必要と感じられるところは、賢治の調査が青ノ木森の源流付近にまで及んだと推定している部分である。「割沢まで川沿いに調査致し」とあることから、割沢まで行ったであろうことは考えられるとしても、そこから先の源流付近まで足を伸ばしたかどうかに関しては、必ずしも決定的なものではない。なぜなら、もし五月二日から三日にかけての二日間の行程を前提に、「檜ノ木大学士の野宿」の「第一夜」をモデル論的に説明しようとした場合、歌稿の「大正七年五月より」との整合性がとれなくなるのではと、私は考えているからである。「大正七年五月より」に収められている短歌の作成時期は、次の括りである「大正八年八月より」まで一年余の幅が想定されるはずで、もし、歌稿の配列

が作成時をある程度正確に反映しているとするとするならば、次に挙げる「葛丸」の添え書きをもつ短歌No.668を、五月二日から三日にかけての作成と考えることには、かなりの無理があるということになるのではないだろうか。

葛丸

ほしぞらは

しづにめぐるを

わがこゝろ

あやしきものにかこまれて立つ

私は、この「葛丸」の短歌を「楢ノ木大学士の野宿」「第一夜」の原体験を示すものと判断しているが、いつ頃作成されたものなのか。歌稿の配列を見てみよう。

「青駒み 流るゝ雲の淵に立ちて／ぶなの木／薄明の六月に入る」、「みちのくも／はてにしあれば七月の終りといふに／そら深むなり」といった、「六月」「七月」という月名を読み込んだ短歌の後に「葛丸」の短歌は置かれているのである。したがって「葛丸」短歌の成立は、八月以降という可能性が高い。賢治がこの「葛丸」の短歌を書いたのは、豊沢川上流の鶯鉾山に向かうルートから高狸山を越え、「葛丸」の源流域である「北の又」に入っ

た時のものでないだろうか。私はその時期を大正七年九月ではないかと推定している。

歌稿の配置が、「北の又」と「鶯沢」「葛丸」の短歌が連続していることに注目しておきたい。

北の又

霧積みて

雫も滋くなりしかば

青くらがりを立てるやまどり

〔鶯沢〕

〔廃坑のうつろをいたみ立ちわぶるわが身の露を風はほしつゝ〕(削除)

栗原敦・杉浦静編『【新編】宮沢賢治歌集』(蒼丘書林、二〇〇六・四)での脚注では、「北の又」葛丸川上流の地名かと記されている。「北の又」の名は他所にも見られるものだが、短歌の配置から、また次に示す書簡の内容から判断した場合、「葛丸川の上流の地名」としての「北の股沢」のことと判断してよいかと思う。賢治の地質調査は、「大日本帝国陸地測量部」が作成した五万分の一の地形図を用いていたはずである。地形図が

なければ山深い場所への単独での調査は危険だからである。

大正七年五月三十日の父政次郎あての葉書で、「私は又六月「鶯宿地形図」の発行次第桂沢、葛丸川方面の調査に参るべく候」とあり、豊沢川上流域の桂沢方面への調査と葛丸川方面の調査が「鶯宿地形図」の発行を待ってからの実施予定であることが分かる。ただし、桂沢は「新町」の地形図の範囲に存在し、「鶯宿」の発行を待つ必要はなかったはずで、おそらくは賢治が、豊沢川上流域の調査を、雪が完全に消え去る時期に実施したいと考えていたことを示している。豊沢川上流域と葛丸川上流域は、距離的にはそれほど隔たっていない。

また、「鶯宿」だが、測図が大正五年、発行は大正七年七月三十日であった。賢治は、「鶯宿」の地形図の発行後、それほど間を置かず調査に入ったと思われる。大正七年九月三日付の河本義行あて書簡No.84に、「私は又歩きはじめています。今は毎日谷を上ってゐます。その谷の青びかりする水の中に白い蛾が貝細工の様になって死んでゐたり、又からだ一杯露にぬれ廢鉢の夕風にふるえたりしてゐるのです」とあり、その「廢鉢」を、『新校本宮澤賢治全集』の「書簡校異篇」では「鶯沢硫黄鉢山」のことであると記している。「廢鉢」が「鶯沢硫黄

鉢山」のことであるなら、賢治は、大正七年九月にも葛丸方面の調査を行っていたと推定可能なのではないだろうか。

五月の調査時は、葛丸川を割沢集落付近まで行き、宿泊または野宿。そこから沢に入り塚瀬森の南側を通り、円森山をぬけ石鳥谷方面（当所、書簡No.60）に戻ってきた。つまり、賢治は予定通りの行動をとっていたと考えたい。大正七年五月一日の天気を「中央氣象台月報」（「水沢」）で確認すると、一日を通じて降雨が記録され、一日の総雨量は19・4mmである。賢治が父政次郎あて書簡に記したように石鳥谷地区も「雨」であったと思われる。「水沢」の記録では翌二日は総雨量が0・1mmで、雲量から推測するに、午前中は「曇り」で、午後から「晴れ」である。翌日の三日は降雨量がゼロ、日中はほぼ「晴れ」、夕方から夜にかけて「曇り」である。天候だけからいえば、細田が推定している葛丸川源流域まで足を延ばすことは可能かと思われるが、大正七年四月一八日の佐々木又治あて書簡（No.54）に「コチラデハマダ雪ガ消キエマセン。私ハ今ソノ消エナイ雪ノ上ヲ毎日毎日歩イテ居ルノデス」とあり、この書簡が示すように、四月中は山間部ではいまだ残雪が多く、割沢より奥の地域である葛丸川上流域の調査は、残雪の危険から調査は

行わなかったように考えられる。

そして、未調査となった葛丸川源流域を調査するため、「鶯宿」の地形図が発行されるのを待って、賢治は九月に葛丸川方面の二度目の調査を行った。賢治が豊沢川上流域から葛丸川方面に入るためには、現在の豊沢ダムの手前である鶯沢に分け入ることになる。その鶯沢の上流に鶯沢硫黄鉱山があった。高狸山の中腹で塚瀬森との間である。その時鉱山はすでに閉じられていた(注4)。

賢治は鶯沢硫黄鉱山を経て、葛丸川の源流域に入り、北の股沢も調査したのだろう。賢治はその折りの体験を「ほしぞらはしづにめぐるをわがこゝろあやしきものにかこまれて立つ」と表したと考えることができる。短歌の内容から判断するに、賢治が葛丸川源流で野宿したことは確かだろう。そして、賢治が感じた「あやしきもの」を、「榎ノ木大学士の野宿」第一夜に現れる岩頸と重ねて考えることに大きな無理はないと思う。

私は本論において、岩頸のモデルを特定しようとしているわけではないので、細部の一致にこだわるつもりはないが、「榎ノ木大学士の野宿」の成立は、大正七年五月と九月に行われた二度の葛丸川方面への地質調査が、賢治の内部で組み合わされたものと考えてよいのではないだろうか。

二二 「葛丸カルデラ」説の検証

細田の地学的解釈には首肯すべきことが多く、その一つに「ヒームカさん」の問題がある。細田が「ヒームカさん」のモデルを日向居木山、「ヒームカさんのおっかさん」のモデルを早池峰山と解釈したことは、それらとともに蛇紋岩であるということにおいて説得力を持つ。原子朗著『新宮澤賢治語彙辞典』(筑摩書房、一九九九・七)では、「ヒームカさん」のモデルを姫神山と説明しているが、もともとは、宮城一男『農民の地学者 宮沢賢治』(築地書館、一九七五・一)で「ヒームカは、北上山脈の山峰のひとつ姫神山がそのモデルだと思われる」と記されたことから始まっている。宮城は地質学者なので、「もっとも、じっさいの姫神山は花崗岩の山です」とも記しており、蛇紋岩と花崗岩の違いを無視していたわけではない。

地学に詳しい人であれば、賢治の作品を「地学童話」として読むことは、拒否しがたい魅惑である。宮城(前出)は、「ラクシャン」第一子を塚瀬森、第三子を権現森、第四子を諸倉山に当てはめている。となると、明記されていないが第二子は青ノ木森ということになるだろうか。確かに地形図で見る限り、宮城のいうように「あたりには、四つのがった山がたちならんで」いる。

ただ、素朴に疑問に思うことは、なぜ宮城はこの四つの山を岩頸のモデルと考えたのかということである。ふつうに考えれば地上に噴出した火山岩の山と考えられる塚瀬森を、なぜ岩頸としての「ラクシャン第一子」に当てはめることが可能となるのか、そこに飛躍がある。ラクシャン四兄弟のモデルとしての塚瀬森、権現森、諸倉山、青ノ木森が、宮城にとって地質学的な意味での岩頸として存在するならモデル説として理解もできるが、岩頸でないものを岩頸のモデルと主張するためには、もう一手間、説明を加えなければならないのではないか。

この問題は、細田論にも根本的に付きまといているものだが、細田は宮城の提示したモデル説を、さらに推し進めるかたちで「葛丸カルデラ」説を導入し、説得力を持たせようとした。この「葛丸カルデラ」説は、ラクシャン四兄弟の「お父さん」の問題を考えると、きわめて効果的な働きをする。ラクシャン第一子の言葉は、私にとってもかなり解釈しにくいものであった。「お父さんはおれが生まれるときなくなつたのだ」。第一子の誕生時に「お父さん」が亡くなつたのなら、第二子、第三子、第四子は どうして誕生することができたのか、理屈が通らなくなってしまうのである。

細田はこの矛盾を「葛丸カルデラ」という仮説で解き

明かせるとした。細田は〈葛丸元山〉を設定し、それを「お父さん」と解釈、〈葛丸元山〉が盛んにマグマを噴き出し、その結果陥没または崩落して「お父さん」は亡くなり、子としての「カルデラの外輪山の兄弟山が生まれた」とするのである。つまり、ラクシャン四兄弟は、「お父さん」である主峰「葛丸元山」の子として同時に誕生したことになり、これで本文解釈上の矛盾が解消されることになる。さらに、「ラクシャン」は「落山」が語源で、ラクサン→ラクシャンと変化したものであるとする。たしかに山を中国語風によめば「シャン」となるので、なるほどという気持ちになる。細田の作成した「葛丸カルデラ（仮称）地域図」（図2）を、次に示す。

細田論の「葛丸カルデラ」説は、地質学者・早川典久の論文を根拠にしたもので、かなりの説得力を持つことになった。細田が引用したものは、早川典久「岩手県葛丸川及び豊沢川上流地方に於ける火山活動に就いて」という論文である。一九五二年十月に『岩石鉱物鉱床学会誌』第36巻第5号に発表されたもの、早川は当時東北大学工学部助教授、鉱山学教室に所属していた。早川は岩手県から委嘱され作成した『岩手県地質説明書Ⅰ』副



図2 葛丸カルデラ（仮称）地域図

題…「北上山地西縁より脊梁山地に亘る地域の新第三系の地質」(岩手県、一九五四・四)においても中心的な働きをしており、東北地方における新第三系地質研究に関する第一人者であった。

細田は、早川の論文「岩手県葛丸川及び豊沢川上流地方に於ける火山活動に就いて」から、以下のように引用している。

本地域の地形的特徴として第一に注目すべき事は、葛丸川上流が高さの(略)等しい山稜を以て囲まれていることである。即ち葛丸川の上流は諸倉山、権現森、青ノ木森、高狸山、塚瀬森を連ねる(略)海拔七〇〇m乃至八〇〇m前後の東側の開いた楕円形弧状稜線を以て画され、此の位置に、中央部葛丸川沿岸に噴火口をもった旧火口を想定することができ、而も葛丸川がその火口瀬に相当するものと考えることが出来る。此の事は後述する如く溶岩及び噴出物の分布状態からも推定されることで、この意味から本火成活動を葛丸火山と仮称する。この稜線上の高狸山等は、遠望するときは明瞭なトロイデ型を呈し、葛丸火山の旧火口壁に生じた側火山であることを示している。

早川は、一九五一年（昭和二六年）の八月と一〇月に、鷲沢鉦山の硫黄鉦床の調査を行っている。これも岩手県からの委嘱であったが、その調査の一環として、周辺地域の地質や火山活動を調査し、論文「岩手県葛丸川及び豊沢川上流地方に於ける火山活動に就いて」として結果を記した。確かに早川は「葛丸火山」を想定しており、葛丸火山の火成活動を「第Ⅰ期」と「第Ⅱ期」に區別し、「第Ⅰ期」を「石英安山岩活動」、「第Ⅱ期」を「含石英両輝石安山岩活動」とし、「第Ⅰ期」をさらに「I a〜I eの5期」に細分し分析している。

賢治が大正七年に行った地質調査の対象の一部は、早川論文の扱う「葛丸川及び豊沢川上流地方」と重なっており、賢治がその地域における火山活動の痕跡をかなりの範囲において観察していたであろうことは指摘しておいてよい事実である。

というのも、早川という「葛丸火山」がもたらした凝灰岩などの噴出物は、南側の豊沢川上流域に当たる地域に多く観察され、賢治が作成した「地質調査ルートマップ」における、西の又沢のポイント61と62が、それに該当してしている。拙著（注3）において私なりの調査結果を記したが、61には流紋岩質軽石凝灰岩、62には流

紋岩質凝灰岩が存在していた。賢治の調査では、ポイント61は無記述となっているが、62には「Jip tuff」と記されており一致する。この西の又沢のポイントは鷲沢鉦山にも近く、高狸山と塚瀬森の中間にあたる南側の斜面に形成された沢である。賢治が「葛丸火山」を想像していたかどうかは別として、葛丸方面の噴火によってもたらされた噴出物であることを、賢治は理解していたのではないだろうか。

ただ、細田における早川論の「葛丸火山」説の解釈において、少し疑問と思われる点があるので、指摘しておきたい。

そもそも、早川論文から「葛丸カルデラ」説を導き出せるかという問題である。早川論文では「カルデラ」という表現は用いられていない点を確認しておく。記されているのは、「溶岩及び噴出物の分布状態から」「火成活動」としての「葛丸火山」が推定され、「中央部葛丸川沿岸に噴火口をもった旧火口を想定することができ」ということである。結論は「要するに葛丸火山の火成活動は、基底第三系中に、鶯宿岩沢構造線の生成に伴って、同構造線上に生じた陥没性湖沼中に行われたもの」で、これらの記述をもって、早川がカルデラ説を唱えたと判断することは難しいのではないかと。

したがって、細田のいう「葛丸カルデラ」と早川の「葛丸火山」とは、区別して考える必要があり、ここでは、細田のいう「葛丸カルデラ」説に関して検討を加えることにしたい。

細田の「葛丸カルデラ」説は、図2から分かるように、諸倉山、権現森、青ノ木森、高狸山、塚瀬森からなる「東側の開いた楕円形弧状稜線」をカルデラの外輪山と見ている点がポイントである。したがって、もし「東側の開いた楕円形弧状稜線」をカルデラの外輪山と解釈しようとするなら、外輪山付近の地質学的調査を行い、火砕流の存在を確認するなどの手続きを踏まなければならぬだろう。早川論において、外輪山に関わる地質学的な調査はまったく行われていないため、細田はそのデータを補わなければならないことになる。

細田は、外輪山の成立を以下のように説明している。

第四紀のはじめころ、第三紀の地層男助層と幕館層を突き破って、現在の北ノ股沢と西ノ股沢の合流点付近に火口をもつ葛丸元山(仮称)ができた。

その後、この葛丸元山が陥没して葛丸カルデラをつくった。

その時の外輪山は噴火と崩落を繰り返して現在の青

ノ木森、高狸、無名峰、塚瀬、権現、諸倉などの葛丸諸山を形成した。これが葛丸諸山の形成史である。

(1952早川より)

賢治は、このことを見抜いていた。

この引用箇所は、「(1952早川より)」とあるように、早川論文を要約するならこのようになるという意味合いのものであるが、実際には早川論文の要約となっていない。どちらかといえば、細田が考えた「形成史」と捉えた方がよいように思う。

細田は「東側の開いた楕円形弧状稜線」を成す諸山が外輪山であり、同時にマグマを噴出する火山であると判断したのだが、それでは地質学的に考えた場合、かなり不自然で説明がつかないことになる。外輪山は通常噴火をしないからである。噴火するとすればそれは外輪山と重なるように発生した側火山の場合であろう。早川は論中、高狸山を「葛丸火山の旧火口壁に生じた側火山」と推定しており、この場合、外輪山(旧火口壁)と側火山とは重なっていることになるが、それは高狸山にのみ当てはまる指摘で、細田の引用にある「高狸山等」ではない。「等」の部分は細田の引用誤記である。細田が「高狸山等」としたことは、早川論を自説としての「葛丸カ

ルデラ」に引き寄せての解釈であったように思われる。

葛丸川源流域が、カルデラであるのかどうかということに関し、細田の引用した早川論文は必ずしもその根拠とならないことを指摘したが、地形だけを眺めればカルデラであるように見えるのは確かである。「賢治は、このことを見抜いていた」と細田は述べるが、たしかに、賢治が葛丸川源流域をカルデラであると観察した可能性は残されるように思われる。

二一三 賢治のカルデラに関する知識

カルデラは大別すれば、爆発型と陥没型とに分けられる。阿蘇、箱根等はは陥没カルデラ、磐梯山、鳥海山等は爆発カルデラと分類される。一般に陥没カルデラは大規模で、爆発カルデラは小規模である。早川論文(『岩手県地質説明書I』)の地質図には、細田が紹介したように、葛丸川源流域に円錐形の山が破線で示されている。それを細田は「葛丸火山」の主峰としての「葛丸元山(仮称)」としているが、その破線は、単に浸食の跡を示した破線とも解釈できる。繰り返しですが、早川論文においてはカルデラの形成に至るシステムやそのデータに関する記述はなされていない。

かりに、細田の「葛丸カルデラ」説にしたがって「葛

丸火山」の規模を考えると、南北約3km東西約4kmのカルデラなので、爆発カルデラとするなら大きすぎ、陥没カルデラが想定されることになるだろう。陥没カルデラというなら榛名山カルデラと同規模のものとなる。

賢治はカルデラについて、どのような知識をもっていたのであろうか。賢治が観察したことがはっきりと分かっているカルデラは、爆発型の岩手山のカルデラである。

詩「東岩手火山」に記された「薬師外輪山」は、東岩手カルデラと呼ばれるもので、東岩手火山の山頂付近に生じた小規模な爆発型カルデラである。薬師岳は外輪山(カルデラ壁)の最も高い地点を指して名付けられている。それに対し、西岩手カルデラの方は、それよりも大きな爆発型カルデラ(東西約2km、南北約一三km)で、爆発的な噴火活動により山体崩壊を起こし、現在のようにな形になったと推定されている。西岩手火山の失われた山頂を、裾野から円錐形の山頂を仮定してみると、東岩手火山の薬師岳よりも高い山頂が聳えていたことが推定できる。現在の西岩手カルデラには、火口丘が複数存在し火口湖もある。

賢治は、陥没型である箱根カルデラも実際目にしてきた可能性がある。高等農林一年の年度終わりに実施された修学旅行(大正五年三月末)で、仲間とともに「箱根

八里を踏破した」と年譜(『新校本宮澤賢治全集』第一六卷下)に記されているからである。また、盛岡高等農林には、阿蘇火山模型と箱根火山模型(大正五年二月購入)があった。関豊太郎教授が教材用に購入したもので、賢治は、阿蘇カルデラ、箱根カルデラの知識を模型からも学ぶことができたはずである。関教授が購入した火山模型については、井上克弘著『石っこ賢さんと盛岡高等農林―偉大な風景画家宮沢賢治―』(地方公論社、一九九二・五)に詳しく、口絵写真も参考になる。

それを見ると、阿蘇カルデラと箱根カルデラの生成の違いが窺えて興味深い。火山模型はカルデラの中央部が縦に二つに割れる仕組みになっており、その断面が絵で示されカルデラ内部の構造が見えるようになっていいる。口絵写真真なので細部まで読み取ることができないが、外輪山がどのような構造なのかはおおよそ知ることができさる。箱根カルデラは、成層火山の中央部が陥没したような内部構造として描かれている。つまり外輪山は先箱根山の山裾部分にあたるような描かれ方である。それに対し阿蘇カルデラは、先阿蘇山が噴出した火砕物のようなものから外輪山が作られているように描かれている。

阿蘇カルデラも箱根カルデラも、現在の生成モデルは当時の生成モデルとかなり異なっているが、その違いを

ここで述べる必要はないであろう。私が強調しておきたいことは、賢治にはカルデラに関するそれ相当の知識と実地の体験があり、加えて、豊沢川上流域の西の又沢での凝灰岩質の噴出堆積物の観察結果から、早川論文で証明されたような活発な火山活動の存在していたことをすでに理解していたということである。

したがって、細田が主張した「賢治は、このことを見抜いていた」という見解に關し、地質学的な裏付けはともかくとして、賢治が「葛丸元山(仮称)」を想像したかもしれないということ自体は、童話「榎ノ木大学士の野宿」のテキスト解釈上きわめて魅力的な仮説として、支持したいと考える。その場合、ラクシャン四兄弟は、お父さんカルデラ(葛丸カルデラ)の陥没・消滅後の中央火口原に生成した火口丘群ということになる。ただ、この火口丘群を、現在の葛丸川源流域に見出すことはできないというのが、私の立場である。したがって、「東側の開いた楕円形弧状稜線」を成す諸山が「葛丸火山」の外輪山であるという細田の説も、あらためて否定しておかなければならない。その地質学的根拠は、稿を改めて述べる予定である。

二一四 現在のカルデラ説

葛丸川上流域は、現在の地質学においてどのようなに判断されているのか。現在の地形を形成しているのは第四紀火山であり、その下部に、新第三紀後期の鮮新世に起源を持つカルデラが形成されていたことが明らかになっている。吉田武義・他10名「東北日本弧における後期新生代の火成活動―内陸地震活動の背景―」（『地学雑誌』129巻4号、二〇二〇・八）には、「葛丸川カルデラ」の存在が記されている。その根拠となった論文は、佐藤二郎「岩手県中部脊梁山地の新第三系地質構造発達史―特に戸沢川カルデラ群の発達史―」（日本地質学会東北支部「会報」第23号、一九九六）である。ここでは「本地域中央部には、従来から第四紀火山とされていた葛丸川火山（早川、1952）が分布する。放射年代の測定により同火山が鮮新世の生成にかかるとある」ことが明らかにされている。佐藤は「葛丸川火山（デイサイト）／同上カルデラ出現」の時期が確定できた根拠として、「⁴⁰Ar/³⁹K」(百万年)と「¹⁴C」年代測定結果を提示している。

佐藤論文に図示されている「葛丸川カルデラ」の範囲が、おおよそ、細田が想定した「葛丸カルデラ」と重なっていることは、興味深いことである。とはいえ、鮮新世に形成された「葛丸川カルデラ」が、現在の葛丸川上流

域の諸山の形成過程とどのように関わっているのかは、不明とせざるを得ない。

鮮新世において多数のカルデラが形成されたことは、伊藤谷生・歌田実・奥山俊一「東北日本脊梁地域に分布する中新世後期―鮮新世のカルデラ群について」（『地質学論集』第32号、一九八九・三）に詳しく、その中の一つとして、盛岡の南東部に「男助カルデラ」の存在が記されている。また、その根拠となった論文、栗田泰夫「東北地方における後期中新世―鮮新世のカルデラ群」（『地質調査所月報』第35巻9号、一九八四）には、盛岡と花巻の間の奥羽山脈東縁に、三つのカルデラが縦に縁部が重なるように存在しているとされる。そこにおいて注目されているのが「堆積湖盆」で、「内部に厚い火砕流堆積物と、湖成堆積物が見られ」、それがカルデラの形成と深い関連があると判断している点である。そこに佐藤論文を重ねてみると、早川論文(1952)における、葛丸川上流域での「湖沼性堆積物」の調査結果が、佐藤論文の「葛丸川カルデラ」に生かされていることの意味に気づかされることになる。

現代の葛丸川源流域に関わるカルデラ説は、「榎ノ木大学士の野宿」を読み解くための新たな知見となるわけではないが、細田が「葛丸カルデラ」の根拠として引用

した早川説が、鮮新世のカルデラの存在を明らかにする基礎資料の一つとなっていたことは、不思議な巡り合わせということになり、感慨深いものがある。

三 おわりに

本稿では、「榎ノ木大学士の野宿」を地質学の観点から考察した細田嘉吉論文を取り上げ、検証を試みた。葛丸川源流域への地質調査の日程に関しては、大正七年五月だけでなく、九月にも調査が行われたのではないかということ。また、「葛丸カルデラ」説に関しては、引用された早川論が、必ずしも地質学的な意味での根拠となっていないことを述べた。また、賢治が葛丸川源流域をカルデラと判断していたのではないかという説には賛意を示す結果となっている。

残された課題である、ラクシャン四兄弟がなぜ岩類として設定されたのかという点に関しては、稿を改めて論じたいと考える。現在の葛丸川源流域の地質はどのようなになっているのかについても、実地調査で得られたデータを後日提供したいと考えている。

注1 この白色の鉱物が、蛋白石（オパール）ではなく石英であることを、拙著『宮沢賢治文学における

地学的想像力―〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる―』（蒼丘書林、二〇一・五）で示し、おそらく賢治はその白い鉱物を蛋白石（オパール）と判断していたと推定できることもそこに示しておいた。

注2

細田嘉吉著、鈴木健司・照井一明編『石で読み解く宮沢賢治』（蒼丘書林、二〇〇八・五）に再録。

注3

注1を参照。

注4

鶯沢硫黄鉱山が休山した時期は、資料により多少異なりがある。ここでは栗原敦が示した、「岩手日報」大正七年七月六日「花巻通信欄」の「七月四日」に「休山式」を兼ねた「送別会」が行われたことを掲載した記事を根拠として用いた。「風の又三郎」雑誌（「宮沢賢治」5号、洋々社、一九八五・四）、『宮沢賢治探究・下』（蒼丘書林、二〇二一・八）に再録。

（本学教授）